

ミュージアム・コンサート

## 東博でバッハ vol.51 玉井菜採 (ヴァイオリン)

### 曲目解説

#### エネスク:《幼き日の印象》より村のヴァイオリン弾き

《幼き日の印象》は、1940年に完成したヴァイオリンとピアノのための作品。10の小品からなり、エネスクの幼年期の心象風景が描かれている。その冒頭を飾るのが、無伴奏ヴァイオリンによる本曲で、まるで辻を渡り歩く楽師が演奏しているような、濃厚な旋律が聴き取れる。

#### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第1番

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》(全6曲)は、3曲ずつのソナタとパルティータで構成されている。1720年の日付がある清書譜が残されているため、おそらくそれ以前、バッハの器楽曲の名品が生まれたケーテン宮廷楽長時代前半の所産と考えられている。

パルティータ第1番は、基本となる4つの舞曲にそれぞれ「ダブル」という変奏曲が付く。格調高い第1楽章はアルマンドとそのダブル。第2楽章はフランス語の「クーリール(走る)」に由来する舞曲クーラント(コレンテ)とそのダブル。第3楽章は16世紀スペイン発祥といわれる荘重なサラバンドとそのダブル。そして第4楽章には17世紀フランス・オーヴェルニュ地方発祥とされる快速なブーレ(ボレア)が来て、最後はそのダブルで曲を閉じる。

#### イザイ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第3番《バラード》

ハンガリーの名ヴァイオリン奏者ヨーゼフ・シゲティが弾くバッハの「無伴奏」に触発され1924年に書かれたのが、イザイの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》(全6曲)。各曲は高名なヴァイオリン奏者に捧げられており、この第3番はジョルジェ・エネスクに献呈された。単一楽章の作品で、単独で演奏されることも多い名品である。

#### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番

このパルティータ第2番の演奏機会が際立って多いのは、第5楽章に置かれた「シャコンヌ」の魅力によるところが大きい。第4楽章までは、伝統的舞曲を並べた定型で進み、全体のボリュームとしてはこれらが前半に相当する。

そして後半を占めるのが、3拍子系の古い舞曲を出自とするシャコンヌであり、その圧倒的な規模、美しさ、崇高さが、パルティータ第2番の真価であるといっても過言ではない。冒頭で呈示される8小節の主題が4小節ずつ前後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、その8小節の主題がさらに30回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた音による建築物ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。